



<研究ノート> 生きる力となる歴史の授業：幕末史を考える

著者	安田 栄三
雑誌名	教職教育研究：教職教育研究センター紀要
号	26
ページ	77-82
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029918

生きる力となる歴史の授業

— 幕末史を考える —

安 田 栄 三

はじめに

2020年の「新学習指導要領」では、「生きる力」を子供たちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等について、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の3つの柱が大事にされている。思い込みにとらわれずに、最新の解釈をもとに歴史の真実を理解し、それを軸に物事を考え判断できる力を育む、そのことが生徒たちにとって「生きる力」となりうる。歴史は私たちに未来の指針を示してくれる。そして最後に問われるのは「人間性」である。どんな状況でも揺るがず、人から信頼される人間力を養うことこそが、学びの本質ではないかと考える。今回は、中学校歴史科の「欧米の進出と日本の開国」の単元の授業を通して生徒たちに考えてほしいことを、実際に授業を行なった経験からまとめてみたいと思う。授業内容をどう切り分け、どこに要点をおいて授業を進めたか、発問に対しての生徒たちの解答などを整理して紹介したい。

江戸時代、特に幕末史は、多くの若者たちが明日の新しい日本の国づくりをめざして、まさに命を懸けて闘った時代であった。幕末に生きた、様々な人々の声に耳を傾けることで、この時代の本物の姿が浮かんでくる。しかし残念なことに、多くの罪のない人々の血が流れることとなった。明治維新は、その上に成り立ったものであり、決してすべてが成功したとは言えない。幕末に生きた志士たちだけではなく、名もなき多くの人々の生き様を通じて、正義とは何か、歴史を学ぶとはどういうことか、勝者の歴史だけではみえないこと、そして生きる意味とは、そんなことを生徒たちが考えるきっかけにしたい。

幕末という日本の大きな転換点を理解することは、今の、そしてこれからの困難な時代を生き抜いていく若者たちにとって、必ず心の支えとなるに違いない。どうしても知ってほしい歴史のストーリーを紹介しつつ、幕末の人々の心に思いを馳せ、そのことが少しでも生徒たちの「生き抜く力」に繋がるような授業になればと思う。

1. 幕末史の授業内容

(導入と起承転結という形で整理する)

(1) 導入：ペリー来航の背景について

日本国内の歴史は、その背後に起こった世界史の出来事を抜きにして考えることはできない。今回の幕末史の導入も、ペリーが来航してから、幕末に生きた人々が懸命に新しい日本の姿を見いだそうとした背景には、たとえば中国とイギリスとの間で起こったアヘン戦争や、中国で洪秀全が理想的な国づくりを目指して清朝や外国と闘った太平天国の乱、またインド国民の大半を巻き込んで起こったインド独立戦争などがある。特にアヘン戦争で、清がいかにイギリスに敗れたかを知った日本人たちはどうすれば外国の植民地にならずに済むのかを懸命に考えて行動している。また、太平天国の乱により、太平軍が戦ってくれたからこそ、イギリスやフランスは日本に本格的に介入する時期を失っている。インドの人々のイギリスに対する必死の抵抗もまたしかりである。授業では、この3つについて紹介し、まるで氷山の一角の如くに表に現れている日本史の出来事だけでは本質は理解できないことを伝える。

◇授業で学んでほしい要点として

(a) アヘン戦争時の林則徐の生き方。

⇒ アヘン戦争が起こり、イギリス艦隊がペキンにやってくると、林則徐の抜擢を快く思っていなかった清の官僚たちは、戦争の責任を彼になすりつけて当時の道光帝に罷免させる。

「林則徐は腐ることなくイリでも行政官として多くの業績を残し、民衆から慕われ、長く語り継がれたそうです。欽差大臣を解任された時、それまで収集していた外国情報を友人の魏源に託しました。魏源がその資料をもとに表わしたのが『海国図志』で、この本はすぐに日本に伝えられ、幕末の志士たちにとって世界情勢を学ぶ貴重な情報源となりました」¹⁾

最後まで清朝に尽くそうとした林則徐の姿勢に、私たちは学ぶものがある。

(b) イギリスは議員投票の僅差で戦争に突入するも、反対したイギリス議員グラッドストンの言葉。

⇒「中国にはアヘン貿易をやめさせる権利がある。これほど、その原因が不正義であり、これほどその進行この国の恥さらしとなるべき戦争は、かつて聞いたこともなければ読んだこともない」イギリスの中には彼のような声もあったのに、イギリス議会は戦争賛成271票、反対262票で開戦を決議したのである¹⁾。

(c) 太平天国を起こした洪秀全がめざしたものと日本との関わりとは。

⇒ 男女平等で貧富の差のない社会をめざす。「軍規は厳しく民家に侵入し略奪したり、飯を炊かせたり荷物を運ばせた者は処刑した。太平天国は蜂起以来13年余りの短い歴史に幕を閉じるが、生き残った農民、鉦夫などの貧しい兵士たちは、人間らしく生きることができた十数年の体験を、ここかしこにひそみながら、後の世のために語り伝えた。」²⁾

幕末、長州藩士久坂玄瑞の言葉「英仏がいまだに日本に武力を加えないのは太平軍が英仏と戦っているだ。」

(d) 「インドのジャンヌ・ダルク」と呼ばれた少女の戦い。

⇒ インドのジャンヌ・ダルクと呼ばれたラクシュミー・バーイは、女性ながら兵士を率いてイギリス軍と勇敢に戦うが、最後は戦死する。その生き様を知る。

(e) 後にインドの独立を果たしたマハトマ・ガンジーのこと。

⇒ ガンジーは第一次世界大戦後、自治の約束を果たさず、弾圧で報いるイギリスに対し、審理をつかみとる戦いを実践し、大衆と共に「非暴力・不服従の抵抗」に立ち上がった。同時にインド国内での身分差別に対しても立ち向かった²⁾。

(f) ペリーが浦賀に来る前に、なぜ琉球に来たのか。

⇒ 開国できなければ、琉球をおさえようとした。「ペリーは200人以上の海兵隊を率いて上陸し、首里の王宮を訪問した。ペリーは琉球の清潔さに驚いた。琉球の王宮の人々のもてなしは丁寧で親切であった。」³⁾

◇ここでの生徒たちへの問いかけについて

「イギリスはどのような方法を用いて、中国貿易で失った銀を回収しようとしたのか。またこれに抵抗した清の林則徐が、後に日本に与えた影響とは」としてみた。実際の生徒の解答を紹介しよう。

「イギリスはインドでケシの実を栽培させてアヘン

をつくり、それを中国に売りつける三角貿易で銀を回収しようとした。アヘンを処分した欽差大臣林則徐は、アヘン戦争の責任を押しつけられ大臣の職から下ろされても、清国のために自分が広州で収集した海外事情を友人の魏源に託していた。彼の『海国図志』が後に日本の幕末の志士たちにとって大きな影響を与えている。林則徐が中国で今も英雄視されていることがわかる」

(2) ペリー来航と幕府の対応

幕末の日本の出来事を「起承転結」に分類するとすれば、「起」にあたる部分が、ペリーの来航と、その後の日米和親条約、日米修好通商条約という二つの条約の締結となるであろう。ここでは、条約締結に動いた人々の心の動きを大切にしたいと考えた。

ペリーについては、彼が帰国後に『日本遠征記』に記しているように、「日本人は洗練された理想的な国民である。日本の職人の技術は世界一になるであろう。もっと自由に発明の能力を発揮できれば、世界でもトップクラスの製造業国となるであろう」と絶賛している。

また、ペリーは「もし日本が近代化したなら、強力なアメリカのライバルになるであろう」と述べている⁴⁾。単に圧力をかけて日本を開国しようとしたのではないことが見えてくる。吉田松陰がペリーの黒船に乗り込もうとしたときも、「このような若者がいるなら、この国の将来は何と有望であるか」と語っている。そこからペリーの人柄をうかがい知ることができる。帰国後わずか4年で病のため死去したことが悔やまれる。

開国を求められた老中首座阿部正弘の対応は、朝廷や諸大名に意見を聞いたことで、彼らに政治への発言力を与えたとして賛否が問われる場合があり、生徒たちに開国の是非について考えさせる問いかけともなりうるだろう。私は「広く国内の意見を求め、優秀な人材を登用し、幕府の独裁を否定して国を挙げて力をあわせ、この難局を乗り越えようとしたこと」は、やはり評価できるのではないかと、生徒たちに投げかけるようにしている。幕府の人間である勝海舟の「広く諸外国と交易を行ない、その利益を持って軍事力を増強し、我が国を植民地転落から救うべきである」⁴⁾ との言葉も阿部に大きな影響を与えた。

「日米修好通商条約を結んだアメリカ総領事ハリスについては、書記官のヒュースケンが日本人に殺害されても（ヒュースケン事件）、江戸にいた他国の公使たちがこの事件を恐れて横浜へ引き上げた時に、彼らを説得して連れ戻している。以来幕府は彼に恩義を感じて全幅の信頼を置き、1861年、57歳になった彼がアメリカへ戻ろうとした時に、老中たちは日本に留まるよう説得し、リンカーン大統領にまで手紙を書いている。」⁴⁾ 後にハリ

スは「人民の本当の幸福の姿、質素と黄金の時代を日本に見いだす」と述べている。

日米修好通商条約は不平等条約だともいわれるが、14回に渡る交渉が行なわれている。交渉段階で領事裁判権などは問題にされなかった。それは、江戸時代の日本が300余りの藩からなる幕藩国家であり、藩ごとに大名が裁判権を行使している。従って領事裁判権以外の選択肢は考えられなかった。また「海外の国と貿易をした際に関税をかける権利があることも知らず、関税自主権がないにもかかわらず、税が徴収できると聞いて喜んだ人もいたくらい」であった¹³⁾。

「交渉過程の記録を見ても、アメリカが自国にばかり有利な条約を結ぼうとしている様子はない。少なくとも日米修好通商条約が不平等条約であるというこれまでの固定観念は捨てるべきではないだろうか」¹²⁾ 事実をしっかり見つめ直してみないと、この条約は単にアメリカによる不平等条約として終わってしまう。当時の時代背景を踏まえて真実を見極めようとするのが、本当の歴史の勉強につながると考える。

人物のストーリーを大事にする時に、この背後に生きた日本人ジョン万次郎のことも抜きにすることはできない。アメリカで多くのことを学び帰国した彼が、アメリカとの開国の後押しに尽力した話は、生徒たちの心を打つ物語であり、アメリカの子供たちにも、万次郎のストーリーは今も見直され、広く読まれている。

◇授業で学んでほしい要点として

(a) ペリーの人物像について。

⇒ ペリーは帰国後に書いた『日本遠征記』の中の言葉に、日本の職人への崇敬がうかがえる。

(b) 阿部正弘の人物と対応について。

⇒ 「老中・阿部正弘はペリーが持参したフィルモア大統領の国書を諸藩に開示し、開国すべきかどうかを広く世に問うた。阿部は日本人全体に危機意識を持たせて、あらゆる英知を結集してこの国難を乗り切ろうと考えたのであろう。」⁴⁾

彼は幕府の枠を越えて日本が進むべき道を優先した。同時に開国に備えてできる限りの準備を行なった。これを安政の改革と呼んでいる。江戸に洋学所がつくられ、海軍伝習所が設置、長崎には造船所が、品川沖には台場が築かれた。幕臣の師弟を教育する講武所も江戸につくられた。また、門閥や年功序列を完全に無視して、有能な人材をどんどん抜擢していったのである。ジョン万次郎や永井尚志らであった。

(c) ジョン万次郎の果たした役割について。

⇒ 「ジョン万次郎は14歳の時に初めて土佐沖で遭難し

たとき、漂流143日後、アメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号に助けられる。船長のホイットフィールドは万次郎を我が子のように可愛がり、鎖国で日本への帰国を許されなかった彼をアメリカに連れて帰り教育を受けさせた。そのため帰国後、アメリカを信頼し、条約締結を後押しする。

薩摩藩主島津斉彬は彼の英語と造船知識に注目し、優秀な家臣を選んで彼から航海術や造船技術を吸収させ、数年後に薩摩藩は日本初の国産蒸気船の製造に成功する。土佐では河田小龍が取り調べという名目で万次郎と寝起きを共にし、英語を教わりながら西洋事情を学んでいた。後に彼のもとに一人の若者が出入りするようになる。彼は小龍を通じて万次郎から伝え聞いたアメリカの話に感動する。この若者こそが坂本龍馬であった。

その後、万次郎は土佐の藩校の教授に就任、その時の教え子が三菱の創始者となる岩崎彌太郎である。彌太郎は万次郎から語学だけではなく、経済学や社会学をも学んでいた。さらに咸臨丸で共にアメリカに渡った勝海舟や、『学問のすゝめ』を書くことになる福沢諭吉にも大きな影響を与える。」⁵⁾ こうした志ある人と人との繋がりが、新しい時代を切り拓いていった歴史の大切さに気づかせたい。

(d) 日米修好通商条約は一方的な不平等条約だったのか。

⇒ 長い時間をかけて両者の議論を経て締結したものであり、これが不平等と認識できる日本人は、当時ほとんどいなかった。

(e) 黒船を真似て蒸気船を造った藩があった。

⇒ 「薩摩藩主島津斉彬・肥前佐賀藩主鍋島閑叟・伊予宇和島藩主伊達宗城が、黒船を造ろうと計画した。宇和島藩では黒船造りに抜擢されたのは、なんと提灯張りの職人であった嘉蔵という人物であった。かつて種子島に鉄砲が伝来してから、2丁買い取っただけでそれと同じものをすぐに作り上げてしまう日本人であった。」⁵⁾

(f) 黒船に乗り込もうとする人物がいた。

⇒ 吉田松陰と金子重之輔はペリーの黒船で密航しようとして失敗、逮捕される。自分の目でアメリカの国を見て、日本の進むべき姿を考えようとしたのである。ペリーは条約締結の大事な時なので彼らをアメリカに連れて行くことはしなかったが「このような若者がいるなら、この国の将来は何と有望であるか」と述べている。

松陰は、郷里の野山獄につながれるものの、牢内の囚人たちに語りかけ、彼らの才能を引き出している。後に叔父の玉本文之進が経営していた松下村塾を引き継ぎ、そこでも人の長所を見抜いてそれを伸ばす教育を行なっ

ている。

(g) ヒュースケン事件とハリスの人柄。

⇒ アメリカ総領事ハリスについては、書記官のヒュースケンが日本人に殺害されても、江戸にいた他国の公使たちがこの事件を恐れて横浜へ引き上げた時に、彼らを説得して連れ戻している。後にハリスは「人民の本当の幸福の姿、質素と黄金の時代を日本に見いだす」と述べている。

(3) 開国後の国内の動き

「起承転結」の「承」にあたる部分が、開国後の日本の動きである。日米修好通商条約を朝廷の許可を得られずに結ばざるを得なかった井伊直弼、将軍家の跡継ぎ問題も絡み、尊王攘夷派による井伊への反感は大きくなる。井伊は反対派を弾圧、安政の大獄の始まりである。貿易が始まったことにより、人々の生活は混乱をきたす。その不満はついに大老暗殺という結果を引き起こす。世に言う桜田門外の変である。幕府はこの事件の後、公武合体の方針に切り替え、孝明天皇の娘和宮を将軍家茂の夫人として迎える。しかしこれにより朝廷の力は強まり、「菊は栄える、葵は枯れる」と言われるようになる。和宮と家茂のお互いの想いの深さにも、時代に翻弄された二人の運命の重さを感じる。

教科書では、ともすれば井伊直弼が悪者になる場面であるが、井伊自身は自分が狙われていることを知っていた。条約調印の朝廷の許可も井伊はほしかったであろうが、孝明天皇はそれを許そうとしなかった。跡継ぎ問題も、血筋だけから言えば井伊の主張は間違っているとは言えない。一期一会という言葉を残した井伊直弼の暗殺、強いて言うならば、ただ安政の大獄に問題があったのかもしれない。最期まで徳川幕府を守ろうとした、それが井伊直弼であった。

授業としては、ここでも開国によって名もなき民衆の気持ちかがどう動いたかに目を向ける必要がある。生徒の目もそこに向けられる。

◇授業で学んでほしい要点として

(a) 遣米使節団のこと。

⇒ 勝海舟・福沢諭吉・ジョン万次郎・津田梅子らのこと。ジョン万次郎はこの時、彼らに大きな影響を与えている。

(b) 安政の大獄での処刑された吉田松陰のこと。

⇒ 松下村塾のことと若者たちに与えた影響（前述）。

(c) 桜田門外の変について。

⇒ その現場の様子。白昼堂々と大老が暗殺されたこと

が、幕府の権威が失墜する大きな引き金となることをおさえる。

(d) 皇女和宮と将軍家茂のこと。

⇒ 徳川将軍で側室を持たなかったのは、幼少の将軍以外に家茂だけ。このことがきっかけで朝廷の政治への発言力が強まる。

(e) 開国によってどんなことが起こったか。

⇒ 後の打ち壊しに繋がる米の高騰や生糸不足により、京都の職人たちが勤王の志士たちを支援した理由につながることをおさえる。

◇ここでの問いかけ

「開国によりどんな問題が起こったか」との問いかけに、生徒は「コレラが持ち込まれ、小判の流出で経済状況が悪化、安い綿織物が輸入され産業も大打撃を受けた。このことは後の百姓一揆や打ち壊しに繋がる。そして生糸が輸出されることで、京都の西陣織も打撃を受け、その苦しみから、新しい国をつくろうと闘う幕末の志士を支援した」としている。

(4) 薩摩藩と長州藩が倒幕という目的に一致するまで

「起承転結」の「転」に入ろう。幕末における薩摩と長州の動きを追うことで、幕末の日本の姿が明確に見えてくる。鹿児島島の薩摩藩は、生麦事件の報復で起こった薩英戦争でイギリスの力を知り、攘夷の不可能を知る。同時に薩摩の力を知ったイギリスと手を組むようになる。長州藩は過激な尊王攘夷派が原因で8.18の政変、池田屋事件、禁門の変、四国艦隊下関砲撃事件、第1次長州征討と負け続ける。坂本龍馬たちの仲介で、薩長の密約が結ばれ、ようやく薩長は手を結び、第2次長州征討で勝利する。

まずは高杉晋作が、長州藩の藩論を倒幕へと向かわせたこと。「長州藩士高杉晋作が、日本の高杉晋作に」なった瞬間である。（山岡荘八著『高杉晋作』）

薩長同盟を成功させるための「日本の問題だ」という坂本龍馬の言葉も、犬猿の仲であった薩長を結びつけることとなる。

◇授業で学んでほしい要点として

(a) 高杉晋作の戦い。

⇒ 身分を越えてつくられたといわれる奇兵隊とその真実・彼を助けた白石正一郎のこと。

奇兵隊によって身分制を打破したと評される高杉は、戦死者の慰霊から部落民だけを排除したという。（『長州藩部落民幕末伝説』）

「下関の豪商・白石正一郎は地元長州の志士たちは勿

論、西郷隆盛や坂本龍馬ら他藩の志士たちの面倒をもみていた。彼が援助した志士の数は400人に及ぶ。なかでも高杉晋作との縁は深く、晋作が奇兵隊を結成したときに本拠地としたのが白石邸なら、維新史を大きく回転させた長州藩俗論打倒のクーデター功山寺挙兵も彼の尽力があったからこそ実現できたのである。⁵⁾

「志を一つにする者が集まれば時代を動かせる。」高杉はそう考えた。

「おもしろきこともなき世をおもしろく」

高杉晋作辞世の句である。

(b) 長州藩が朝敵となってゆく過程。

⇒ 池田屋事件・禁門の変・第1次長州征討という一連の流れをつかむこと。特に禁門の変では、御所に向かって発砲したことが、朝敵となる口実を与えることとなった。また第1次長州征討では、西郷隆盛が禁門の変での長州の負傷者を届けたことが、長州降伏の大きな要因となったことにも目を向けさせる。(大河ドラマ『西郷どん』)

(c) 西郷隆盛と勝海舟の会談。

⇒ 世界視野から日本のあり方を見ようとした海舟。「敵も味方もない、身分にかかわらず優秀な人物を登用すべし」との勝海舟の言葉。

(d) 薩長同盟を結んだ坂本龍馬の志。

⇒ 日本全体の問題としての薩長同盟の意義を説き、薩長が争っている間に外国が侵入することによって、日本がアヘン戦争後の清のような植民地になることを恐れた。薩摩の西郷、長州の桂小五郎は、最後はそのことで認識を一致させた。

◇ここでの問いかけ

「薩長同盟成立の原因は何か」に対し、生徒は「不作で困っていた薩摩に対して長州が米を用意、幕府のイギリスへの圧力で武器を買えなかった長州に、薩摩がイギリスから買った武器を用意し、お互いの利害関係を坂本龍馬が一致させた。さらに龍馬は、これは日本全体の問題である。今、薩長が争っていれば、日本は外国につけている隙を与えてしまい、日本が外国の植民地になってしまう」と答えている。

(5) 大政奉還から江戸幕府の滅亡、そして明治維新へ

いよいよ「起承転結」の「結」に入りたい。

坂本龍馬は長崎から京都に向かう土佐藩船「夕顔」の中で、後藤象二郎に船中八策を提案する。そのねらいは「幕府に代わり朝廷を中央に置き、議会をつくり民意を取り入れ、中央政府の直属軍を置き、外国との不平等条

約を改正する」というものであった。これが大政奉還論の元となる。

最後の将軍となる徳川慶喜は、大政奉還を受け入れることにより、ここに江戸幕府は終焉を迎える。坂本龍馬は、大政奉還を受け入れた慶喜に対し、「慶喜公、よくぞ決断してくれた。おれは誓ってこの人のために一命を捧げよう」そう言って涙を流したという。しかし、慶喜には、新しい政府でもう一度政権を担当する思いがあった。それを許そうとしなかったのが薩長である。徳川家を打倒しない限り、新しい時代の到来はないと考えていたのだ。

慶喜に辞官納地を要請する薩長は、江戸市中に火をつけ挑発する。これに対し旧幕府側はついに戦闘態勢をとる。こうして鳥羽伏見の戦いが始まる。なぜこんなに多くの血が流れなければならなかったのか。坂本龍馬がめざしたのは、徳川家を温存して、慶喜を据え新しい政府をつくることであった。龍馬暗殺も、そのことに反対する勢力の仕業と考えられる。

ここでは、江戸城無血開城に関わった山岡鉄舟や西郷隆盛、勝海舟の思いと、それに従わずに彼らなりの正義を貫こうとした彰義隊。天皇や幕府のために懸命に尽くしてきたにも関わらず、いつの間にか朝敵とされた松平容保はじめ会津藩の人々の戦い、特に白虎隊や自決した西郷頼母家族の女性たちのこと(西郷頼母の親類縁者を合わせて21人が潔く自刃を遂げ、西郷邸の床は、鮮血で真っ赤に染まった。)(大河ドラマ『八重の桜』)¹²⁾ また新選組を率い最後まで武士らしく戦った土方歳三、戦争後の西郷隆盛と庄内藩と間の出来事など、多くの人の思いが交錯する。そんな人々の思いから、生徒たちには犠牲者を出さずに新しい世の中へ移行する術はなかったのか、今の世の中が、歴史を通じてどんなに多くの人々の思いの上に成り立っているのかを考えるきっかけにしてほしいと願う。

◇授業で学んでほしい要点として

(a) 坂本龍馬の船中八策とは。

⇒ 大政奉還論につながるものであり、週ればジョン万次郎の影響を受けている⁵⁾。

(b) 龍馬はなぜ暗殺されたのか。黒幕は誰か。

⇒ 徳川家を温存し、平和的に新しい国家を作ろうとした龍馬の考えに反対するものの仕業か。龍馬の考えで進めれば、あれだけ多くの血は流れなかった。

(c) 江戸城無血開城の実現の理由。

⇒ 江戸の町を火の海にしないため、江戸市民100万人の命を守るため、西郷隆盛と幕府の勝海舟両者の考えが一致した。

(d) 会津藩の悲劇について。

⇒ 幕府のため、天皇のために忠誠を尽くしてきた会津藩が、いつの間にか朝敵にされたのはなぜか。戊辰戦争で犠牲になった会津市民の姿から考える。薩摩長州の会津藩許しがたきという考えが、根底にあったのか。

(e) 幕臣・小栗上野介のこと。

⇒「幕府の未来に限りがあるとも、日本の未来に限りはない」幕臣小栗上野介は、遣米使節団としてワシントンの造船所を見学、帰国後横須賀に造船所を造ろうとした。後に連合艦隊司令長官東郷平八郎は「日本海海戦でロシア艦隊を破ることができたのは、小栗さんが横須賀に造船所を造っておいてくれたおかげだ」と、小栗の遺族を訪ねて語っている。

戊辰戦争終結後、小栗上野介は賊軍として斬首されている。42歳であった。

2. 授業の進め方

実際の授業では、『歴史学習プリント』を配布して歴史の流れをつかみながら、重要な事項に解説を加え、共に考え、ノートにまとめさせる。授業では作成したスライドや視聴覚教材を用いる場合がある。また授業中に紹介したストーリーは、『歴史通信』という形で生徒に配布する。それを読み返すことによって、どんな話であったのかを思い起こし、授業の振り返りに使うようにする。生徒の思考力や判断力をいかに伸ばすことができるか、それは歴史の真実に繋がる問いかけをどう用意するかにかかっていると思う。授業中での生徒たちの言葉のキャッチボールでは、生徒の発言を大事にし、決して否定することなく、なぜ生徒たちがそう考えたのかを大事にして、真実に気づけるようにできればと考えている。

3. 最後に

今回の単元の中で、様々な人物の生き様をできるだけ紹介しながら、私たちが過去の出来事から未来に向けて何を学ぶべきかを軸に据えて授業を進めることを心がけてきた。

人間一人一人が共に築き上げてきた人類の歴史は、人間らしい生き方を求め続けた、名もなき多くの民衆の闘いの積み重ねでもある。そこに残された逞しく誠実な生きざまに、私たちは与えられた人生を、いかに生きるべきか学ぶことができる。過去の過ちを繰り返さないため、もっと生きたいと願って亡くなっていった人々の死を決して無駄にしないため、歴史を学んでほしい。

歴史は自分の生きる道を教えてくれる。どんなに辛いときでも、人はどう前向きに生きるべきかの指針を与え

てくれる。それが「生きる力と人間性」を育むことに繋がると考える。

人の痛みをわかり、一人も辛い思いをすることのない集団づくりに努め、誠実に生きるという信念をお互いに共有できる学校づくりに、この授業が少しでも役に立てばと願ってきた。

学校生活や授業の中での誠実さの上に成り立つ信頼関係こそが、思いっきり褒め合える風通しの良い学校につながる。そのことが、生きる力と希望を持ち、人権感覚の豊かな、感性の磨かれた生徒の育つ学校づくりであると私は確信している。歴史の中に生きる人々の声にしつかり耳を傾けることで、生徒たちが「学びに向かう力」と「素晴らしい人間性」を育めることができればと願う。

【参考文献】

- 1) 浅野典夫『なぜ？がわかる世界史』Gakken (2015) 254～257頁
- 2) 大江一道・山崎利男『物語世界史への旅』山川出版社 (1981) 268～269頁 356～360頁
- 3) 家永三郎『日本の歴史：4 明治維新』ほるぷ出版 (1982) 28頁
- 4) 河合 敦『裏も表もわかる日本史 幕末・維新編』実業之日本社 (2014) 27～32頁 69頁
- 5) ひすいこたろう・白駒妃登美『人生に悩んだら「日本史」に聞こう』祥伝社 (2011) 149～153頁 36～41頁 88～92頁
- 6) 司馬遼太郎『竜馬がゆく』文藝春秋 (1998)
- 7) 山本博文『こんなに変わった日本史教科書』宝島社 (2017)
- 8) 松平定知『幕末維新を「本当に」動かした10人』小学館新書 (2010)
- 9) 熊谷充晃『教科書には載っていない！幕末の大誤解』彩図社 (2013)
- 10) 石原靖久『司馬遼太郎を読めば常識がひっくり返る！』新講社 (2009)
- 11) 磯田道史『司馬遼太郎で学ぶ日本史』NHK 出版新書 (2017)
- 12) 山村竜也『目からウロコの幕末維新』PHP 文庫 (2009) 33頁 206頁
- 13) 野島博之『ストーリーで学び直す大人の日本史講義』祥伝社 (2018) 151頁
- 14) 司馬遼太郎『司馬遼太郎の日本史探訪』角川文庫 (2004)
- 15) 歴史教育者協議会『わかってたのしい中学社会科歴史の授業』大月書店 (2002)
- 16) 大江一道・世界史ネットワーク『世界史の情景1』飛鳥 (1992) 150～152頁
- 17) 向山洋一編・渡辺尚人著『中学校の世界史を20場面で完全理解』PHP 研究所 (1999)
- 18) 加藤祐三・川北稔『世界の歴史25巻 アジアと欧米世界』中央公論社 (1998)

(やすだ えいぞう・関西学院中学部教諭)